The Human Science Research Bulletin
2010, No. 9, 155-184

いじめ被害の実態

―― 大阪府公立中学校生徒を対象にした意識・実態調査から ――

児童学部児童学科　石川義之

抄録：2008年に大阪府の公立中学校2校の生徒490名を対象にした「いじめ」調査を実施した。本稿では，「いじめ」被害に関するデータを分析し，それによって得られた若干の知見を明らかにする。

本稿の内容は以下のとおりである。

はじめに
1. 調査実施の概要
2. 回答者の属性
3. いやがらせ被害の経験率
4. 最も傷ついたいやがらせ被害経験
5. いやがらせ被害の男女間比較
6. いやがらせ被害の背景要因
7.「現在の心理的状況」といやがらせ被害経験の有無
8. いやがらせの原因といやがらせへの対応策
9. まとめ
10. 考察

キーワード：いじめ，いやがらせ

はじめに

今回，大阪府下の公立中学校2校の生徒さんたちの協力を得て，いやがらせ＝いじめについての実態調査を実施した。調査票法（自計式調査票法）による集合調査法で行い，490名中446名から回答を得た。有効回答率は91.0%であった。

平成17年（2005年）の全国の中学校におけるいじめの発生件数は12,794件，うち大阪府の中学校での発生件数は744件であったという（大阪府 2009)。これは文部科学省の調べによるものだが，実態はもっと深刻であるにちがいないという思いが，われわれを新たな調査に駆り立てた。もっともいじめ調査はこれまで多く実施されており，屋上屋を架す懸念はあったが，身近なところで綿密な調査を行うことはそれなりの意味があると考えたのである。アンケート調査に加えて教員へのインタビュー調査も実施している。インタビュー調査の分析は別に譲ることにして，小論ではアンケート調査の一部データの分析を試みる。小規模調査であるので，この調査データに基づく知見を一般化するつもりはないが，中学校におけるいじめに対応していく場合のいくつかの有意義な知見が示されたと思っている。これらの知見が現場で有効に活用されることを願っている。

アンケートでは，いじめ加害の実態についても調べているが，小論では紙数の関係もあり，いじめ被害に絞ってデータ分析を進めていく。インタビュー調査の分析とも併せて，加害実態の分析は別の機会に譲る。

アンケートの末尾の自由回答欄に次のような記述があった。「こういうアンケートをとって，もっと傷ついている子のことを分かって，いい社会にしていくべきだ。」（中3　女）「自分勝手な行動

をとらずもっと人の事をかんがえ，どんな人にも優しい人間になろうと思いました。」（中３　女）「私１人ではいやがらせは止められないかもしれないけれど，そういうことは絶対あってはいけないなとあらためて思った。」（中１　女）「こういうアンケートは定期的にあったらいいなとおもいます。」（中１　男）「このアンケートで昔のことをいろいろ思い出した。このようないじめがなくなればいいと思う。」（中２　女）「いやがらせをしたくなくても，友達や周りの目が気になったり，自分もいやがらせを受けるのがこわいしいやだから一緒になっていやがらせをしてしまうことがあると思います。」（中３　女）「このようなアンケートをして自分を見つめなおした方がいいと思う。」（中１　男）「１人１人社会全体がいやがらせやいじめは絶対にいけないことだと思っていれば，いやがらせやいじめはなくなると思う。」（中１　女）

アンケートへの期待や肯定的意見も散見される。小論が，こうした好意的意見に対して多少なりとも応えうるものとなっていることを願う。

1. 調査実施の概要

(1) 調査対象者

大阪府公立中学校２校の生徒 490 名。

(2) 調査方法

調査票法（自計式調査票法）による集合調査法。

(3) 調査時期

2008 年 10 月 10 日～11 月 11 日

(4) 有効回答数／対象者数・有効回答率

446 名／490 名・91.0%。

2. 回答者の属性

(1) 性別

表 1-1　性別

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	男	223	50.0	50.3	50.3
	女	220	49.3	49.7	100.0
	合計	443	99.3	100.0	
欠損値	無回答	3	.7		
合計		446	100.0		

回答者の性別は，男子生徒 50.0%，女子生徒 49.3%，性別不明 0.7%となっている。有効パーセントでは男子生徒 50.3%，女子生徒 49.7%である（表 1-1)。

(2) 学年

表 1-2　学年

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	中学1年生	173	38.8	39.1	39.1
	中学2年生	129	28.9	29.2	68.3
	中学3年生	140	31.4	31.7	100.0
	合計	442	99.1	100.0	
欠損値	無回答	4	.9		
合計		446	100.0		

学年別では，中学１年生 38.8%，中学２年生 28.9%，中学３年生 31.4%，学年不明 0.9%となっている。有効パーセントでは中学１年生 39.1%，中学２年生 29.2%，中学３年生 31.7%である（表 1-2)。

(3) 家族構成（同居者別比率）

表 1-3　家族構成（同居者別比率）

		応答数 N	応答数 パーセント	ケースのパーセント
家族構成	父と同居	347	38.8%	78.3%
	母と同居	419	46.9%	94.6%
	祖父と同居	39	4.4%	8.8%
	祖母と同居	65	7.3%	14.7%
	その他の同居人	24	2.7%	5.4%
合計		894	100.0%	201.8%

家族構成（同居者別比率）をみると，「父と同居」は回答者の 78.3%，「母と同居」94.6%，「祖父と同居」8.8%，「祖母と同居」14.7%，「その他と同居」5.4%，となっている（表 1-3）。

3. いやがらせ被害の経験率

(1) いやがらせの種類別被害率

いやがらせ（いじめ）の種類別被害率については，「冷やかしやからかい，悪口を言われた」が最も多く回答者の 45.7%を占める。以下「たたかれたり，けられたりした」26.4%，「仲間はずれや集団で無視をされた」19.3%，「持ち物をかくされたり，こわされたり，ぬすまれたりした」18.3%，「パソコンや携帯電話で悪口を書き込まれたりいやなことをされた」10.6%，「お金をとられたり，持って来いと言われた」及び「上の項目以外でいやがらせを受けた」[1] 2.7%，とつづいている。今話題のネットいじめ被害（「パソコ

表 2-1　いやがらせの種類別被害率　　件数（パーセント）

いやがらせ被害の種類	ある	ない	合計
冷やかしやからかい、悪口を言われた	203 (45. 7)	241 (54. 3)	444 (100. 0)
たたかれたり、けられたりした	117 (26. 4)	327 (73. 6)	444 (100. 0)
仲間はずれや集団で無視をされた	85 (19. 3)	356 (80. 7)	441 (100. 0)
お金をとられたり、持って来いと言われた	12 (2. 7)	430 (97. 3)	442 (100. 0)
持ち物をかくされたり、こわされたり、ぬすまれたりした	81 (18. 3)	362 (81. 7)	443 (100. 0)
パソコンや携帯電話で悪口を書き込まれたりいやなことをされた	47 (10. 6)	395 (89. 4)	442 (100. 0)
上の項目以外でいやがらせを受けた	12 (2. 7)	426 (97. 3)	438 (100. 0)

1)「上の項目以外でいやがらせを受けた」⇒「どのようないやがらせですか？」
- 先輩からのおどし。（女　中学二年）
- 通りがかるときにわざと舌打ちされたり，ぶつかられたり。（女　中学二年）
- 本人は本気ではしていないと思うのですが，冗談で「死んじゃえば」みたいなことを言われたことがある。（女　中学二年）
- 悪口や水をかけられた。（女　中学一年）
- 悪口が書かれていた紙を丸めて机の上や席の周りに置かれていた。（女　中学三年）

ンや携帯電話で悪口を書き込まれたりいやなことをされた」）が1割強を占めていることが注目される（表2-1）。

(2) いやがらせ被害の種類別内訳

び「仲間はずれ，集団で無視」という心理的・ネグレクト的いやがらせ被害が合計で5割を超える。一方，「たたかれる，けられる」の身体的いやがらせ被害も2割強を占めている（表2-2，図1）。

表2-2　いやがらせ被害の種類別内訳

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	冷やかしやからかい、悪口を言われた	203	36.4	36.4	36.4
	たたかれたり、けられたりした	117	21.0	21.0	57.5
	仲間はずれや集団で無視をされた	85	15.3	15.3	72.7
	お金をとられたり、持って来いと言われた	12	2.2	2.2	74.9
	持ち物をかくされたり、こわされたり、ぬすまれたりした	81	14.5	14.5	89.4
	パソコンや携帯電話で悪口を書き込まれたりいやなことをされた	47	8.4	8.4	97.8
	上の項目以外でいやがらせを受けた	12	2.2	2.2	100.0
	合計	557	100.0	100.0	

いやがらせ（いじめ）被害の全件数557件を100%とした場合のいやがらせ被害の種類別内訳をみると，「冷やかしやからかい，悪口を言われた」が最も多く全被害件数の36.4%を占める。以下「たたかれたり，けられたりした」21.0%，「仲間はずれや集団で無視をされた」15.3%，「持ち物をかくされたり，こわされたり，ぬすまれたりした」14.5%，「パソコンや携帯電話で悪口を書き込まれたりいやなことをされた」8.4%，「お金をとられたり，持って来いと言われた」及び「上の項目以外でいやがらせを受けた」2.2%，とつづいている。「冷やかし，からかい，悪口」及

(3) いやがらせ被害経験の有無

7つのいやがらせ被害項目のうちどれか1つでも受けた経験がある場合を「いやがらせ被害経験あり」とし，どれも受けた経験がない場合を「いやがらせ被害経験なし」とすると，「いやがらせ被害経験あり」が52.5%，「いやがらせ被害経験なし」が47.5%で，「いやがらせ被害経験あり」が過半に達している。いやがらせ（いじめ）は，世情言われているだけでなく，現実に多発しているといえよう（表2-3）。

- 手紙。（女　中学二年）
- グループでにらまれた。（女　中学二年）
- 目の前で内緒話をされた。（女　中学三年）
- さけられた。（女　中学一年）
- 特定の男子集団がこっちをみて笑ってきたり悪口を言っている。今はないけどいつも一緒にいるメンバーに一時期はぶたれた。（女　中学一年）
- キモイとか死ねとか冗談半分で言い合いしていたら本当にむかついてきてお互い言い合いになった。（女　中学一年）
- 歩いているときにうわぐつのかかとをふまれたり，階段でおされたりした。（女　中学一年）

図1　いやがらせ被害の種類別内訳

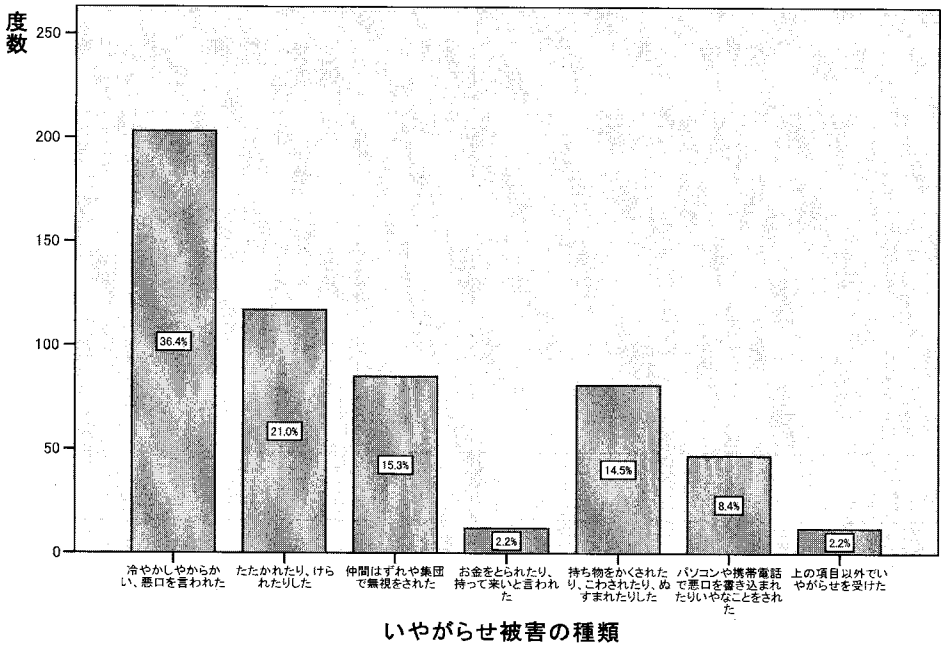

表2-3　いやがらせ被害経験の有無

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	いやがらせ被害経験なし	211	47.3	47.5	47.5
	いやがらせ被害あり	233	52.2	52.5	100.0
	合計	444	99.6	100.0	
欠損値	システム欠損値	2	.4		
合計		446	100.0		

4. 最も傷ついたいやがらせ被害経験

(1) 最も傷ついたいやがらせの選択数・内訳比・選択比

いやがらせ被害を受けたことのある回答者に，自分の受けた被害のなかで「最も傷ついた被害」を1つ選んでもらった。選択数が最も多かったのは「冷やかしやからかい，悪口を言われた」で内訳比41.6%，以下，「仲間はずれや集団で無視をされた」25.6%，「たたかれたり，けられたりした」13.6%，「持ち物をかくされたり，こわされたり，ぬすまれたりした」11.0%，などとなっている。

いやがらせ被害の種類別に，「最も傷ついた被害」として選ばれた件数を被害件数で除して100をかけた「選択比」を算出したところ，「仲間はずれや集団で無視をされた」が最も多く65.9%，次いで「冷やかしやからかい，悪口を言われた」の44.8%，以下，「上の項目以外でいやがらせを受けた」33.3%，「持ち物をかくされたり，こわされたり，ぬすまれたりした」29.6%，「パソコンや携帯電話で悪口を書き込まれたりいやなことをされた」25.5%，「お金をとられたり，持って来いと言われた」25.0%，「たたかれたり，けられたりした」24.8%，となっている（表3-1)。

「仲間はずれや集団で無視」や「冷やかしやからかい，悪口」といったネグレクト的・心理的いやがらせが「最も傷ついた被害」として受け取ら

表3-1　最も傷ついたいやがらせの選択数・内訳比・選択比

いやがらせ被害の種類	選択数A（件数）	被害数B（件数）	内訳比（%）	選択比A／B（%）
冷やかしやからかい、悪口を言われた	91	203	41.6	44.8
たたかれたり、けられたりした	29	117	13.2	24.8
仲間はずれや集団で無視をされた	56	85	25.6	65.9
お金をとられたり、持って来いと言われた	3	12	1.4	25.0
持ち物をかくされたり、こわされたり、ぬすまれたりした	24	81	11.0	29.6
パソコンや携帯電話で悪口を書き込まれたりいやなことをされた	12	47	5.5	25.5
上の項目以外でいやがらせを受けた	4	12	1.8	33.3
合計	219	557	100.0	－

れる比率が高く，「たたかれたり，けられたりした」という身体的いやがらせはその比率が低かった。ネグレクトや心理的暴力のほうが身体的暴力よりも被害者を傷つける度合いが高いことが推定される。

(2) 最も傷ついたいやがらせを受けたときの動揺の程度

最も傷ついたいやがらせを受けたときどの程度動揺したかという問いに対しては，「とても動揺した」が最も多く36.2%，以下，「少し動揺した」31.3%，「あまり動揺しなかった」21.4%，「全く動揺しなかった」11.2%，とつづいている。「とても動揺した」と「少し動揺した」とを合わせた「動揺した」が67.4%にのぼる（表3-2）。

(3) 最も傷ついたいやがらせの相手（加害者）

最も傷ついたいやがらせの相手（加害者）につ

表3-2　動揺の度合（4分法）

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	とても動揺した	81	18.2	36.2	36.2
	少し動揺した	70	15.7	31.3	67.4
	あまり動揺しなかった	48	10.8	21.4	88.8
	全く動揺しなかった	25	5.6	11.2	100.0
	合計	224	50.2	100.0	
欠損値	無回答	222	49.8		
合計		446	100.0		

表3-3　いやがらせをしてきた相手

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	クラスメイト	118	26.5	53.2	53.2
	違うクラスの同級生	73	16.4	32.9	86.0
	上級生	12	2.7	5.4	91.4
	下級生	2	.4	.9	92.3
	他の学校の生徒	3	.7	1.4	93.7
	その他	14	3.1	6.3	100.0
	合計	222	49.8	100.0	
欠損値	無回答	224	50.2		
合計		446	100.0		

いては，「クラスメイト」が最も多く 53.2%，次いで「違うクラスの同級生」で 32.9%，以下，「その他」6.3%，「上級生」5.4%，「他の学校の生徒」1.4%，「下級生」0.9%，とつづいている（表 3-3）。

「クラスメイト」と「違うクラスの同級生」とを合わせた「同級生」が 86.0%を占める。いやがらせ（いじめ）は，主に同級生間で行われていることが推定される。

(4) 最も傷ついたいやがらせの相手（加害者）の人数

最も傷ついたいやがらせの相手（加害者）の人数については，「一人」が最も多く 33.8%，次いで「五人以上」で 28.0%，以下，「二人」17.8%，「三人」13.8%，「四人」6.7%，となっている。「一人」が最も多いが，「五人以上」も 3 割近くを占める。「二人」以上の「集団」によるいやがらせ（いじめ）は 66.2%にのぼる（表 3-4）。こうして，「集団」によるいやがらせ（いじめ）が過半に達していることが注目される。

(5) 最も傷ついたいやがらせをされた場所

最も傷ついたいやがらせをされた場所については，「教室」が最も多く 46.6%，次いで「教室・部活以外の学校内」で 17.0%，以下，「部活動の中」12.1%，「学校以外」11.2%，「携帯電話やインターネットの中」7.2%，「その他」5.8%，となっている。

「教室」・「教室・部活以外の学校内」・「部活動の中」を合わせた「学校内」が 75.8%を占め，「学校以外」は 11.2%にすぎない。「携帯電話やインターネットの中」というメディアを媒介したいやがらせは 7.2%であった（表 3-5）。

表 3-4　いやがらせをしてきた相手の人数

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	一人	76	17.0	33.8	33.8
	二人	40	9.0	17.8	51.6
	三人	31	7.0	13.8	65.3
	四人	15	3.4	6.7	72.0
	五人以上	63	14.1	28.0	100.0
	合計	225	50.4	100.0	
欠損値	無回答	221	49.6		
合計		446	100.0		

表 3-5　いやがらせをされた場所

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	教室	104	23.3	46.6	46.6
	部活動の中	27	6.1	12.1	58.7
	1・2以外の学校内	38	8.5	17.0	75.8
	学校以外	25	5.6	11.2	87.0
	けいたい電話やインターネットの中	16	3.6	7.2	94.2
	その他	13	2.9	5.8	100.0
	合計	223	50.0	100.0	
欠損値	非該当	1	.2		
	無回答	222	49.8		
	合計	223	50.0		
合計		446	100.0		

(6) 最も傷ついたいやがらせの継続期間

最も傷ついたいやがらせの継続期間については，「1 回だけ」が最も多く 41.0%，次いで「1 週間ぐらい」及び「2 週間～1 カ月ぐらい」で 20.3%，以下，「2 カ月～3 カ月ぐらい」8.6%，「1 年以上」

表 3-6　いやがらせの継続期間

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	1回だけ	91	20.4	41.0	41.0
	1週間ぐらい	45	10.1	20.3	61.3
	2週間～1ヵ月ぐらい	45	10.1	20.3	81.5
	2か月～3ヵ月ぐらい	19	4.3	8.6	90.1
	4ヵ月～6ヵ月ぐらい	9	2.0	4.1	94.1
	7ヵ月～1年ぐらい	3	.7	1.4	95.5
	1年以上	10	2.2	4.5	100.0
	合計	222	49.8	100.0	
欠損値	無回答	224	50.2		
合計		446	100.0		

4.5%，「4 カ月～6 カ月ぐらい」4.1%，「7 カ月～1 年ぐらい」1.4%，となっている。「1 カ月以内」が 81.5%と大半を占めるが，「1 年以上」継続しているケースも 10 件，4.5%にのぼっていることが注目される（表3-6）

(7) 最も傷ついたいやがらせを受けたときの対処法

人でやり返した」11.5%（16.7%），「その他の対処法」8.7%（12.6%），「担任の先生に相談」8.0%（11.7%），「きょうだいに相談」1.9%（2.7%），「担任以外の先生に相談」1.5%（2.3%），「スクールカウンセラーに相談」0.9%（1.4%），とつづいている。

「誰にも相談しなかった」及び「何もしないでいやがらせをされるまま」の「泣き寝入り」が合

表 3-7　いやがらせを受けたときの対処法

		応答数 N	応答数 パーセント	ケースのパーセント
いやがらせを受けたときの対処法	いやがらせをしてきた人にやめてと言った	43	13.3%	19.4%
	何もしないでいやがらせをされるまま	41	12.7%	18.5%
	一人でやり返した	37	11.5%	16.7%
	親に相談	47	14.6%	21.2%
	きょうだいに相談	6	1.9%	2.7%
	友達に相談	41	12.7%	18.5%
	担任の先生に相談	26	8.0%	11.7%
	担任以外の先生に相談	5	1.5%	2.3%
	スクールカウンセラーに相談	3	.9%	1.4%
	誰にも相談しなかった	46	14.2%	20.7%
	その他の対処法	28	8.7%	12.6%
合計		323	100.0%	145.5%

最も傷ついたいやがらせを受けたときの対処法としては，「親に相談」が最も多く内訳比 14.6%（有効数 222 ケースの 21.2%），次いで「誰にも相談しなかった」で 14.2%（20.7%），以下，「いやがらせをしてきた人にやめてと言った」13.3%（19.4%），「何もしないでいやがらせをされるまま」及び「友だちに相談」12.7%（18.5%），「一

計内訳比で 33.5%を占めている。「やめてと言った」と「一人でやり返した」及び「その他の対処法」の「積極的対応」は合計 24.8%，誰かに「相談した」のは合計 39.6%を数える。「相談の相手」は「親」（14.6%）と「友だち」（12.7%）が多いが，「担任の先生」も 8.0%を占めている（表 3-7）。

(8) 対処の結果，いやがらせはなくなったか

表 3-8　対処の結果，いやがらせはなくなったか

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	はい	186	41.7	83.0	83.0
	いいえ	38	8.5	17.0	100.0
	合計	224	50.2	100.0	
欠損値	無回答	222	49.8		
合計		446	100.0		

「対処の結果，いやがらせはなくなったか」については，「なくなった」が 83.0%，「なくならなかった」は 17.0%であった（表 3-8）。

(9) いやがらせがなくなった理由

表 3-9　いやがらせがなくなった理由

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	自然になくなった	111	24.9	58.7	58.7
	友達がとめてくれた	11	2.5	5.8	64.6
	いやがらせをする子に抗議した	8	1.8	4.2	68.8
	自分の代わりに他の子がいやがらせを受けた	5	1.1	2.6	71.4
	みんなで話し合いをした	11	2.5	5.8	77.2
	先生が注意してくれた	26	5.8	13.8	91.0
	その他	17	3.8	9.0	100.0
	合計	189	42.4	100.0	
欠損値	非該当	1	.2		
	無回答	256	57.4		
	合計	257	57.6		
合計		446	100.0		

いやがらせがなくなった理由については，「自然になくなった」が最も多く 58.7%，次いで「先生が注意してくれた」で 13.8%，以下，「その他」9.0%，「友だちがとめてくれた」及び「みんなで話し合いをした」5.8%，「いやがらせをする子に抗議をした」4.2%，「自分の代わりに他の子がいやがらせを受けた」2.6%，となっている。

被害者の抵抗によるのでもなく，また第 3 者の仲介によるのでもなく「自然になくなった」というケースが半数を超える。現在の教室には仲裁者はいなくなったと言われるが，このデータでは，「友だちがとめてくれた」と「みんなで話し合いをした」とを合わせて，「仲裁者役割」が演じられたと見なされるケースが計 11.6%にのぼる。また，「先生が注意してくれた」が 13.8%に及び，いやがらせ場面で教師が一定の肯定的役割を果たしていることが窺われる（表 3-9）。

5. いやがらせ被害の男女間比較

(1)「冷やかしやからかい，悪口を言われた」の男女間比較

いやがらせ被害の男女間の差に関して，まず「冷やかしやからかい，悪口を言われた」についてみると，「被害経験あり」の内訳は「女子」56.7%，「男子」43.3%で，「女子」のほうが被害経験率が高い。この関係は，$p<.01$ で統計的に有意である（表 4-1）。

(2)「たたかれたり，けられたりした」の男女間比較

表4-1 「冷やかしやからかい，悪口を言われた」と性別のクロス表

		冷やかしやからかい、悪口を言われた		合計
		ある	ない	
性別	男	88	134	222
		39.6%	60.4%	100.0%
		43.3%	56.3%	50.3%
	調整済み残差	-2.7	2.7	
	女	115	104	219
		52.5%	47.5%	100.0%
		56.7%	43.7%	49.7%
	調整済み残差	2.7	-2.7	
合計		203	238	441
		46.0%	54.0%	100.0%
		100.0%	100.0%	100.0%

$\chi 2$ 乗値＝7.353　自由度＝1　p 値＝0.008　p＜.01

表4-2 「たたかれたり，けられたりした」と性別のクロス表

		たたかれたり、けられたりした		合計
		ある	ない	
性別	男	82	140	222
		36.9%	63.1%	100.0%
		70.1%	43.2%	50.3%
	調整済み残差	5.0	-5.0	
	女	35	184	219
		16.0%	84.0%	100.0%
		29.9%	56.8%	49.7%
	調整済み残差	-5.0	5.0	
合計		117	324	441
		26.5%	73.5%	100.0%
		100.0%	100.0%	100.0%

$\chi 2$ 乗値＝24.836　自由度＝1　p 値＝0.000　p＜.001

「たたかれたり，けられたりした」については，「被害経験あり」の内訳は「男子」70.1%，「女子」29.9%で，「男子」のほうが被害経験率が顕著に高い。この関係は，p＜.001 で統計的に有意である（表4-2）。

(3)「仲間はずれや集団で無視をされた」の男女間比較

「仲間はずれや集団で無視をされた」については，「被害経験あり」の内訳は「女子」74.1%，「男子」25.9%で，「女子」のほうが被害経験率が顕著に高い。この関係は，p＜.001 で統計的に有意である（表4-3）。

(4)「お金をとられたり，持って来いと言われた」の男女間比較

「お金をとられたり，持って来いと言われた」については，「被害経験あり」の内訳は「男子」83.3%，「女子」16.7%で，「男子」のほうが被害経験率が顕著に高い。この関係は，p＜.05 で統計的に有意である（表4-4）。

(5)「持ち物をかくされたり，こわされたり，ぬすまれたりした」の男女間比較

「持ち物をかくされたり，こわされたり，ぬすまれたりした」については，「被害経験あり」の内訳は「男子」56.8%，「女子」43.2%で，「男子」のほうが被害経験率がわずかに高い。しかし，

表 4-3 「仲間はずれや集団で無視された」と性別のクロス表

		仲間はずれや集団で無視をされた		
		ある	ない	合計
性別	男	22	198	220
		10.0%	90.0%	100.0%
		25.9%	56.1%	50.2%
	調整済み残差	-5.0	5.0	
	女	63	155	218
		28.9%	71.1%	100.0%
		74.1%	43.9%	49.8%
	調整済み残差	5.0	-5.0	
合計		85	353	438
		19.4%	80.6%	100.0%
		100.0%	100.0%	100.0%

$\chi 2$ 乗値＝25.006　自由度＝1　p 値＝0.000　p＜.001

表 4-4 「お金をとられたり，持って来いと言われた」と性別のクロス表

		お金をとられたり、持って来いと言われた		
		ある	ない	合計
性別	男	10	210	220
		4.5%	95.5%	100.0%
		83.3%	49.2%	50.1%
	調整済み残差	2.3	-2.3	
	女	2	217	219
		.9%	99.1%	100.0%
		16.7%	50.8%	49.9%
	調整済み残差	-2.3	2.3	
合計		12	427	439
		2.7%	97.3%	100.0%
		100.0%	100.0%	100.0%

Fisher の直接法　p 値＝0.036　p＜.05

表 4-5 「持ち物をかくされたり，こわされたり，ぬすまれたりした」と性別のクロス表

		持ち物をかくされたり、こわされたり、ぬすまれたりした		
		ある	ない	合計
性別	男	46	175	221
		20.8%	79.2%	100.0%
		56.8%	48.7%	50.2%
	調整済み残差	1.3	-1.3	
	女	35	184	219
		16.0%	84.0%	100.0%
		43.2%	51.3%	49.8%
	調整済み残差	-1.3	1.3	
合計		81	359	440
		18.4%	81.6%	100.0%
		100.0%	100.0%	100.0%

$\chi 2$ 乗値＝1.710　自由度＝1　p 値＝0.219　n.s.

この関係は，統計的に有意に達しなかった（表 4-5）。

(6)「パソコンや携帯電話で悪口を書き込まれたり，いやなことをされた」の男女間比較

表 4-6 「パソコンや携帯電話で悪口を書き込まれたり，いやなことをされた」と性別のクロス表

		パソコンや携帯電話で悪口を書き込まれたり、いやなことをされた		
		ある	ない	合計
性別	男	18	202	220
		8.2%	91.8%	100.0%
		38.3%	51.5%	50.1%
	調整済み残差	-1.7	1.7	
	女	29	190	219
		13.2%	86.8%	100.0%
		61.7%	48.5%	49.9%
	調整済み残差	1.7	-1.7	
合計		47	392	439
		10.7%	89.3%	100.0%
		100.0%	100.0%	100.0%

$\chi 2$ 乗値＝2.940　自由度＝1　p 値＝0.092　p＜.10

「パソコンや携帯電話で悪口を書き込まれたり，いやなことをされた」については，「被害経験あり」の内訳は「女子」61.7%，「男子」38.3%で，「女子」のほうが被害経験率が高い。この関係は，p＜.10 で統計的に有意である（表4-6）。

(7)「上の項目以外でいやがらせを受けた」の男女間比較

(8)「いやがらせ被害経験の有無」の男女間比較

「いやがらせ被害経験の有無」と性別との関係については，「いやがらせ被害経験あり」は「女子」54.1%，「男子」45.9%で，「女子」のほうが被害経験率が高い。一方，「いやがらせ被害経験なし」は「男子」55.3%，「女子」44.7%で，「男子」のほうが被害無経験率が高い。この関係は，

表 4-7 「上の項目以外でいやがらせを受けた」と性別のクロス表

		上の項目以外でいやがらせを受けた		
		ある	ない	合計
性別	男	1	219	220
		.5%	99.5%	100.0%
		8.3%	51.8%	50.6%
	調整済み残差	-3.0	3.0	
	女	11	204	215
		5.1%	94.9%	100.0%
		91.7%	48.2%	49.4%
	調整済み残差	3.0	-3.0	
合計		12	423	435
		2.8%	97.2%	100.0%
		100.0%	100.0%	100.0%

Fisher の直接法　p 値＝0.003　p＜.01

「上の項目以外でいやがらせを受けた」については，「被害経験あり」の内訳は「女子」91.7%，「男子」8.3%で，「女子」のほうが被害経験率が圧倒的に高い。この関係は，p＜.01 で統計的に有意である（表4-7）。

p＜.10 で統計的に有意である（表4-8）。

(9)「最も傷ついたいやがらせ被害経験」の男女間比較

「最も傷ついたいやがらせ被害経験」として選ばれた被害項目と性別との関係は表 4-9に示され

表4-8 「いやがらせ被害の有無」と性別のクロス表

		いやがらせ被害経験の有無		
		いやがらせ被害経験なし	いやがらせ被害あり	合計
性別	男	115	107	222
		51.8%	48.2%	100.0%
		55.3%	45.9%	50.3%
	調整済み残差	2.0	-2.0	
	女	93	126	219
		42.5%	57.5%	100.0%
		44.7%	54.1%	49.7%
	調整済み残差	-2.0	2.0	
合計		208	233	441
		47.2%	52.8%	100.0%
		100.0%	100.0%	100.0%

$\chi 2$ 乗値＝3.856　自由度＝1　p 値＝0.056　p＜.10

表4-9 「最も傷ついたいやがらせ」と性別のクロス表

		最も傷ついたいやがらせ							
		冷やかしやからかい、悪口を言われた	たたかれたり、けられたりした	仲間はずれや集団で無視をされた	お金をとられたり、持って来いと言われた	持ち物をかくされたり、こわされたり、ぬすまれたりした	パソコンや携帯電話で悪口を書き込まれたり、いやなことをされた	上の項目以外でいやがらせを受けた	合計
性別	男	38	26	12	3	16	3	0	98
		38.8%	26.5%	12.2%	3.1%	16.3%	3.1%	.0%	100.0%
		41.8%	89.7%	21.4%	100.0%	66.7%	25.0%	.0%	44.7%
	調整済み残差	-.8	5.2	-4.1	1.9	2.3	-1.4	-1.8	
	女	53	3	44	0	8	9	4	121
		43.8%	2.5%	36.4%	.0%	6.6%	7.4%	3.3%	100.0%
		58.2%	10.3%	78.6%	.0%	33.3%	75.0%	100.0%	55.3%
	調整済み残差	.8	-5.2	4.1	-1.9	-2.3	1.4	1.8	
合計		91	29	56	3	24	12	4	219
		41.6%	13.2%	25.6%	1.4%	11.0%	5.5%	1.8%	100.0%
		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

Fisher の直接法＝51.005　p 値＝0.000　p＜.001

ている。「たたかれたり，けられたりした」において最も顕著な差が見られ，男子 89.7%に対して女子 10.3%で，男子において被害率が高い。次いで差が大きいのは，「仲間はずれや集団で無視をされた」で，女子 78.6%に対して男子 21.4%であり，女子において被害率が高い。次が「持ち物をかくされたり，こわされたり，ぬすまれたりした」で，男子 66.7%に対して女子 33.3%となっており，男子において被害率が高い。これらの関係は，p＜.001 で統計的に有意である（表4-9）。

(10)「動揺の程度」(2分法）の男女間比較

最も傷ついたいやがらせ被害を受けたときの「動揺の程度」と性別との関係については，「動揺した」(「とても動揺した」と「少し動揺した」とを合わせたもの）は，「女子」60.9%，「男子」39.1%で，「女子」のほうがが高い。一方，「動揺しなかった」(「あまり動揺しなかった」と「全く動揺しなかった」とを合わせたもの）は，「男子」60.3%，「女子」39.7%で，「男子」のほうがが高い。いやがらせ被害を受けたときの「動揺の程度」は女子

表 4-10　動揺の度合（2 分法）と性別のクロス表

		動揺の度合(2分法)		
		動揺した	動揺しなかった	合計
性別	男	59	44	103
		57.3%	42.7%	100.0%
		39.1%	60.3%	46.0%
	調整済み残差	-3.0	3.0	
	女	92	29	121
		76.0%	24.0%	100.0%
		60.9%	39.7%	54.0%
	調整済み残差	3.0	-3.0	
合計		151	73	224
		67.4%	32.6%	100.0%
		100.0%	100.0%	100.0%

$\chi 2$ 乗値＝8.905　自由度＝1　p 値＝0.004　p＜.01

のほうが高いといえる。この関係は，p＜.01 で統計的に有意である（表 4-10）。

(11)「いやがらせの継続期間」の男女間比較

表 4-11　いやがらせの継続期間と性別のクロス表

		いやがらせの継続期間							
		1回だけ	1週間ぐらい	2週間～1ヵ月ぐらい	2か月～3ヵ月ぐらい	4ヵ月～6ヵ月ぐらい	7ヵ月～1年ぐらい	1年以上	合計
性別	男	52	19	14	8	3	0	6	102
		51.0%	18.6%	13.7%	7.8%	2.9%	.0%	5.9%	100.0%
		57.1%	42.2%	31.1%	42.1%	33.3%	.0%	60.0%	45.9%
	調整済み残差	2.8	-.6	-2.2	-.4	-.8	-1.6	.9	
	女	39	26	31	11	6	3	4	120
		32.5%	21.7%	25.8%	9.2%	5.0%	2.5%	3.3%	100.0%
		42.9%	57.8%	68.9%	57.9%	66.7%	100.0%	40.0%	54.1%
	調整済み残差	-2.8	.6	2.2	.4	.8	1.6	-.9	
合計		91	45	45	19	9	3	10	222
		41.0%	20.3%	20.3%	8.6%	4.1%	1.4%	4.5%	100.0%
		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

Fisher の直接法＝12.423　p 値＝0.043　p＜.05

「いやがらせの継続期間」と性別との関係については，「1 回だけ」では「男子」57.1%に対して「女子」42.9%で，「男子」の比率が高い。一方，「2 週間～1 カ月ぐらい」では，「女子」68.9%に対して「男子」31.1%で，「女子」の比率が高い。概して，「男子」は「1 回だけ」が多く，いやがらせを「繰り返し受けている」のは「女子」に多い，といえる。ただし，「1 年以上」は，「男子」60.0%に対して「女子」40.0%で，「男子」に多い。この関係は，p＜.05 で統計的に有意である（表 4-11）。

(12)「何もしないでいやがらせをされるまま」の男女間比較

いやがらせを受けたときの「対処法」に関して，「何もしないでいやがらせをされるまま」になったのは，「女子」68.3%に対して「男子」31.7%で，「女子」のほうに多かった。この関係は，p＜.05 で統計的に有意である（表 4-12）。

(13)「一人でやり返した」の男女間比較

いやがらせを受けたときの「対処法」において「一人でやり返した」場合については，「男子」75.7%に対して「女子」24.3%で，「男子」のほ

表 4-12 「何もしないでいやがらせをされるまま」と性別のクロス表

			何もしないでいやがらせをされるまま		合計
			いいえ	はい	
性別	男		210	13	223
			94.2%	5.8%	100.0%
			52.2%	31.7%	50.3%
		調整済み残差	2.5	-2.5	
	女		192	28	220
			87.3%	12.7%	100.0%
			47.8%	68.3%	49.7%
		調整済み残差	-2.5	2.5	
合計			402	41	443
			90.7%	9.3%	100.0%
			100.0%	100.0%	100.0%

$\chi 2$ 乗値＝6.274　自由度＝1　p 値＝0.014　$p<.05$

表 4-13 「一人でやり返した」と性別のクロス表

			一人でやり返した		合計
			いいえ	はい	
性別	男		195	28	223
			87.4%	12.6%	100.0%
			48.0%	75.7%	50.3%
		調整済み残差	-3.2	3.2	
	女		211	9	220
			95.9%	4.1%	100.0%
			52.0%	24.3%	49.7%
		調整済み残差	3.2	-3.2	
合計			406	37	443
			91.6%	8.4%	100.0%
			100.0%	100.0%	100.0%

$\chi 2$ 乗値＝10.367　自由度＝1　p 値＝0.002　$p<.01$

うが「一人でやり返した」比率が高い。この関係は，$p<.01$ で統計的に有意である（表 4-13）。

(14)「親に相談」の男女間比較

いやがらせを受けたときの「対処法」において「親に相談」した場合については，「女子」72.3%に対して「男子」27.7%で，「女子」のほうが「親に相談した」比率が高い。この関係は，$p\leq$

表 4-14 「親に相談」と性別のクロス表

			親に相談		合計
			いいえ	はい	
性別	男	度数	210	13	223
		性別 の %	94.2%	5.8%	100.0%
		親に相談 の %	53.0%	27.7%	50.3%
		調整済み残差	3.3	-3.3	
	女	度数	186	34	220
		性別 の %	84.5%	15.5%	100.0%
		親に相談 の %	47.0%	72.3%	49.7%
		調整済み残差	-3.3	3.3	
合計		度数	396	47	443
		性別 の %	89.4%	10.6%	100.0%
		親に相談 の %	100.0%	100.0%	100.0%

$\chi 2$ 乗値＝10.818　自由度＝1　p 値＝0.001　$p\leq.001$

.001 で統計的に有意である（表 4−14）。

(15)「きょうだいに相談」の男女間比較

いやがらせを受けたときの「対処法」において「きょうだいに相談」した場合については，「女子」100.0％に対して「男子」0.0％で，「きょうだいに相談」したのは「女子」のみであった。この関係は，p<.05 で統計的に有意である（表 4−14）。

表 4−15 「きょうだいに相談」と性別のクロス表

		きょうだいに相談 いいえ	きょうだいに相談 はい	合計
性別	男	223	0	223
		100.0%	.0%	100.0%
		51.0%	.0%	50.3%
	調整済み残差	2.5	−2.5	
	女	214	6	220
		97.3%	2.7%	100.0%
		49.0%	100.0%	49.7%
	調整済み残差	−2.5	2.5	
合計		437	6	443
		98.6%	1.4%	100.0%
		100.0%	100.0%	100.0%

Fisher の直接法　p 値＝0.014　p<.05

(16)「友だちに相談」の男女間比較

いやがらせを受けたときの「対処法」において「友だちに相談」した場合については，「女子」87.8％に対して「男子」12.2％で，「女子」のほうが「友だちに相談した」比率が高い。この関係は，p<.001 で統計的に有意である（表 4−16）。

表 4−16 「友だちに相談」と性別のクロス表

		友達に相談 いいえ	友達に相談 はい	合計
性別	男	218	5	223
		97.8%	2.2%	100.0%
		54.2%	12.2%	50.3%
	調整済み残差	5.1	−5.1	
	女	184	36	220
		83.6%	16.4%	100.0%
		45.8%	87.8%	49.7%
	調整済み残差	−5.1	5.1	
合計		402	41	443
		90.7%	9.3%	100.0%
		100.0%	100.0%	100.0%

$\chi 2$ 乗値＝26.296　自由度＝1　p 値＝0.000　p<.001

(17)「担任の先生に相談」の男女間比較

いやがらせを受けたときの「対処法」において「担任の先生に相談」した場合については，「女子」65.4％に対して「男子」34.6％で，「女子」のほうが「担任の先生に相談した」比率が高い。しかし，この関係は，統計的に有意に達しなかった（表 4−17）。

(18)「誰にも相談しなかった」の男女間比較

いやがらせを受けたときの「対処法」に関して，「誰にも相談しなかった」場合については，「女子」60.9％に対して「男子」39.1％で，「女子」のほうが「誰にも相談しなかった」比率が高い。しかし，この関係は，統計的に有意に達しなかった（表 4−18）。

表 4-17 「担任の先生に相談」と性別のクロス表

		担任の先生に相談		合計
		いいえ	はい	
性別	男	214	9	223
		96.0%	4.0%	100.0%
		51.3%	34.6%	50.3%
	調整済み残差	1.7	-1.7	
	女	203	17	220
		92.3%	7.7%	100.0%
		48.7%	65.4%	49.7%
	調整済み残差	-1.7	1.7	
合計		417	26	443
		94.1%	5.9%	100.0%
		100.0%	100.0%	100.0%

$\chi 2$ 乗値＝2.732　自由度＝1　p 値＝0.109　n.s.

表 4-18 「誰にも相談しなかった」と性別のクロス表

		誰にも相談しなかった		合計
		いいえ	はい	
性別	男	205	18	223
		91.9%	8.1%	100.0%
		51.6%	39.1%	50.3%
	調整済み残差	1.6	-1.6	
	女	192	28	220
		87.3%	12.7%	100.0%
		48.4%	60.9%	49.7%
	調整済み残差	-1.6	1.6	
合計		397	46	443
		89.6%	10.4%	100.0%
		100.0%	100.0%	100.0%

$\chi 2$ 乗値＝2.579　自由度＝1　p 値＝0.121　n.s.

(19) 対処の結果いやがらせがなくなった場合の「いやがらせがなくなった理由」の男女間比較

対処の結果いやがらせがなくなったかどうかについては男女間に統計的に有意な差はみられなかったが，いやがらせがなくなった場合の「いやがら

表 4-19 「いやがらせがなくなった理由」と性別のクロス表

		いやがらせがなくなった理由							合計
		自然になくなった	友達がとめてくれた	いやがらせをする子に抗議した	自分の代わりに他の子がいやがらせを受けた	みんなで話し合いをした	先生が注意してくれた	その他	
性別	男	58	3	1	1	1	13	9	86
		67.4%	3.5%	1.2%	1.2%	1.2%	15.1%	10.5%	100.0%
		52.3%	27.3%	12.5%	20.0%	9.1%	50.0%	52.9%	45.5%
	調整済み残差	2.2	-1.3	-1.9	-1.2	-2.5	.5	.6	
	女	53	8	7	4	10	13	8	103
		51.5%	7.8%	6.8%	3.9%	9.7%	12.6%	7.8%	100.0%
		47.7%	72.7%	87.5%	80.0%	90.9%	50.0%	47.1%	54.5%
	調整済み残差	-2.2	1.3	1.9	1.2	2.5	-.5	-.6	
合計		111	11	8	5	11	26	17	189
		58.7%	5.8%	4.2%	2.6%	5.8%	13.8%	9.0%	100.0%
		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

Fisher の直接法＝14.699　p 値＝0.017　p＜.05

せがなくなった理由」については男女間に有意な差が現れた。

まず，「みんなで話し合いをした」について，「女子」90.9%に対して「男子」9.1%で，「女子」において「みんなで話し合いをした」比率が高かった。逆に，「自然になくなった」については，「男子」52.3%に対して「女子」47.7%で，「男子」において「自然になくなった」比率が高かった。「いやがらせをする子に抗議をした」「自分の代わりに他の子がいやがらせを受けた」「友だちがとめてくれた」の3項目については「女子」の比率が高かった。この関係は，$p<.05$ で統計的に有意である（表4-19）。

6. いやがらせ被害の背景要因

(1)「保護者は回答者の話を真剣に聞いてくれる」と「いやがらせ被害経験の有無」との関係

「保護者が話を真剣に聞いてくれる」生徒の場合，いやがらせの予兆のみえる段階で親に相談して，いやがらせを未然に解消していることが推定される。この意味で，「保護者の子に対する態度の真剣さの有無」がいやがらせ被害の背景要因として存在することが考えられる。

(2)「1番悩んだり心配していること」と「いやがらせ被害経験の有無」との関係

「1番悩んだり心配していること」と「いやがらせ被害経験の有無」との関係については，まず「悩みや心配はない」生徒は「いやがらせ被害経験なし」が多く（71.6%），「いやがらせ被害経験あり」が少ない（28.4%）。次に，「友人関係」について悩んだり心配している生徒は「いやがらせ被害経験あり」が多く（70.3%），「いやがらせ被害経験なし」が少ない（29.7%）。また，「その他」のことについて悩んだり心配している生徒は「いやがらせ被害経験あり」が多く（80.0%），「いやがらせ被害経験なし」が少ない（20.0%）。「塾や習い事」について悩んだり心配している生徒は「いやがらせ被害経験なし」が多く（77.8%），「いやがらせ被害経験あり」が少ない（22.2%）。「母親との関係」について悩んだり心配している生徒の場合は「いやがらせ被害経験あり」が多く（100.0%），「いやがらせ被害経験なし」が少ない

表5-1 「いやがらせ被害経験の有無」と「保護者はあなたの話を真剣に聞いてくれる」のクロス表

		保護者はあなたの話を真剣に聞いてくれる		合計
		はい	いいえ	
いやがらせ被害経験の有無	いやがらせ被害経験なし	189	21	210
		90.0%	10.0%	100.0%
		49.7%	33.9%	47.5%
	調整済み残差	2.3	−2.3	
	いやがらせ被害あり	191	41	232
		82.3%	17.7%	100.0%
		50.3%	66.1%	52.5%
	調整済み残差	−2.3	2.3	
合計		380	62	442
		86.0%	14.0%	100.0%
		100.0%	100.0%	100.0%

$\chi 2$ 乗値＝5.380　自由度＝1　p 値＝0.028　$p<.05$

いやがらせ被害の背景要因としてはどのようなものがあるのだろうか。

「保護者は回答者の話を真剣に聞いてくれるか」という質問に対して，「はい」と回答した者は「いやがらせ被害経験なし」が多く（49.7%），「いいえ」と回答した者は「いやがらせ被害経験あり」が多い（66.1%）。この関係は，$p<.05$ で統計的に有意である（表5-1）。

表5-2 「1番悩んだり心配していること」と「いやがらせ被害経験の有無」とのクロス表

		1番の悩み・心配									合計
		友人関係	母親との関係	父親との関係	きょうだいとの関係	学校の先生との関係	学校の勉強	塾や習い事	悩みや心配はない	その他	
いやがらせ被害経験の有無	いやがらせ被害経験なし	41	0	5	5	2	61	14	73	7	208
		19.7%	.0%	2.4%	2.4%	1.0%	29.3%	6.7%	35.1%	3.4%	100.0%
		29.7%	.0%	55.6%	100.0%	50.0%	51.7%	77.8%	71.6%	20.0%	47.8%
	調整済み残差	-5.2	-2.4	.5	2.3	.1	1.0	2.6	5.5	-3.4	
	いやがらせ被害あり	97	6	4	0	2	57	4	29	28	227
		42.7%	2.6%	1.8%	.0%	.9%	25.1%	1.8%	12.8%	12.3%	100.0%
		70.3%	100.0%	44.4%	.0%	50.0%	48.3%	22.2%	28.4%	80.0%	52.2%
	調整済み残差	5.2	2.4	-.5	-2.3	-.1	-1.0	-2.6	-5.5	3.4	
合計		138	6	9	5	4	118	18	102	35	435
		31.7%	1.4%	2.1%	1.1%	.9%	27.1%	4.1%	23.4%	8.0%	100.0%
		100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

$\chi 2$ 乗値＝70.412　自由度＝8　p 値＝0.000　p＜.001

(0.0%)。「きょうだいとの関係」について悩んだり心配している生徒の場合は「いやがらせ被害経験なし」が多く（100.0%），「いやがらせ被害経験なし」が少ない（0.0%）。これらの関係は，p＜.001 で統計的に有意である（表5-2）。

「友人関係」「その他」「母親との関係」に悩んだり心配している場合は「いやがらせ被害経験あり」が多く，「悩みや心配はない」場合と「塾や習い事」「きょうだいとの関係」に悩んだり心配している場合とでは「いやがらせ被害経験なし」が多い。「友人関係」「その他」「母親との関係」に悩んだり心配しているのは「いやがらせ」の「結果」とも解釈できるが，それらのことに悩み心配していることが過剰に親密な集団関係を希求させ，その濃密な集団関係との齟齬からいやがらせが誘発されていることも考えられる。その意味で，「友人関係」「その他」「母親との関係」に悩み・心配をもつことが，いやがらせ被害の背景要因として働いていることも想定できる。

(3)「悩み・心配の有無」と「いやがらせ被害経験の有無」との関係

(2) の設問への回答を加工して「悩み・心配の有無」の2分法とし「いやがらせ被害経験の有無」とクロスさせると，「悩み・心配がある」場合は「いやがらせ被害経験あり」が多く（59.5%），

表5-3 「悩み・心配の有無」と「いやがらせ被害経験の有無」のクロス表

		悩み・心配の有無		合計
		悩み・心配がある	悩み・心配はない	
いやがらせ被害経験の有無	いやがらせ被害経験なし	135	73	208
		64.9%	35.1%	100.0%
		40.5%	71.6%	47.8%
	調整済み残差	-5.5	5.5	
	いやがらせ被害あり	198	29	227
		87.2%	12.8%	100.0%
		59.5%	28.4%	52.2%
	調整済み残差	5.5	-5.5	
合計		333	102	435
		76.6%	23.4%	100.0%
		100.0%	100.0%	100.0%

$\chi 2$ 乗値＝30.127　自由度＝1　p 値＝0.000　p＜.001

「悩み・心配はない」場合は「いやがらせ被害経験なし」が多い（71.6%）。この関係は，p<.001で統計的に有意である（表5-3）。

「悩み・心配がある」場合「いやがらせ被害経験あり」が多いのは，いやがらせを受けているから「悩み・心配がある」ことも想定できるが，逆に，「悩み・心配がある」ことが過剰な集団帰属をもたらし，その集団との軋轢からいやがらせが誘発されることも想定できる。この意味で，「悩み・心配を抱えていること」もいやがらせ被害の背景要因として押さえておくことが必要である。

(4)「休み時間や放課後などに多くの友だちより，決まった友だちと一緒にいる」と「いやがらせ被害経験の有無」との関係

表5-4 「いやがらせ被害経験の有無」と「休み時間や放課後など多くの友達より，決まった友達と一緒にいる」のクロス表

		休み時間や放課後など多くの友達より、決まった友達と一緒にいる		
		はい	いいえ	合計
いやがらせ被害経験の有無	いやがらせ被害経験なし	153	58	211
		72.5%	27.5%	100.0%
		45.9%	53.2%	47.7%
	調整済み残差	-1.3	1.3	
	いやがらせ被害経験あり	180	51	231
		77.9%	22.1%	100.0%
		54.1%	46.8%	52.3%
	調整済み残差	1.3	-1.3	
合計		333	109	442
		75.3%	24.7%	100.0%
		100.0%	100.0%	100.0%

$\chi 2$乗値＝1.737　自由度＝1　p値＝0.224　n.s.

「休み時間や放課後などに多くの友だちより，決まった友だちと一緒にいる」と「いやがらせ被害経験の有無」との関係については，「決まった友だちと一緒にいる」と答えた生徒の場合は「いやがらせ被害経験あり」が多く（54.1%），「いない」と答えた生徒の場合は「いやがらせ被害経験なし」のほうが多かった（53.2%）。ただし，この関係は統計的有意には達しなかった（表5-4）。

統計的に有意な差は出なかったが，「多くの友だちより，決まった友だちと一緒にいる」ことがいやがらせ被害の背景要因となっていることを窺わせる分析結果である。

＊「いやがらせ被害経験の有無」と統計に有意な関係が認められなかった項目

①「心から信じられる友だちはいますか」

②「あなたの話を真剣に聞いてくれる先生がいますか」

③「悩みを1番相談する人は誰ですか」

④「あなたの友だち関係・学校生活・悩みなどを保護者はどれくらい知っていますか」

⑤「他の仲良しグループの人たちと話したり，遊んだりしますか」

⑥「隣近所の違う年齢の人たちと遊んだり，話すことがありますか」

⑦「中学生になってから，部活動に所属していますか」

⑧「現在，塾や習い事にどれくらい行っていますか」

本調査では以上の8項目はいやがらせ被害の背景要因とはなっていないことが認定された。本調査から窺われるいやがらせ被害の背景要因の主たるものは固定した集団への過剰同調である。「悩み・心配事」があって，その解消を求めて固定し

た仲間集団に過剰に帰属する。それらの「悩み・心配事」の主因は「友人関係」や「母親との関係」などである。「友人関係」や「母親との関係」などに悩み，それらからの解放を求めて固定した集団に過剰に同調する。過剰に関与しているから少々嫌なことがあっても離れられない。いやがらせはエスカレートしていく。それでもこの固定した仲間集団から離れられない（土井 2008）。その際，保護者が生徒の話を真剣に聞いてくれる態度を持していれば，固定集団への過剰同調から離脱し，いやがらせ（いじめ）を解消することができる場合もある。こうした構図を，本調査に基づくデータ分析は浮かび上がらせてくれるのである。

7.「現在の心理的状況」といやがらせ被害経験の有無

(1) 生徒の「現在の心理的状況」

回答者である生徒の「現在の心理的状況」は表6-1のようになっている。

①～④は「はい」が肯定的な心理的状況であり，⑤～⑧は「いいえ」が肯定的な心理的状況を示す。

肯定的な心理的状況の比率が最も高いのは「どんな人でも無理なく仲良くできる」で65.7%，次いで「将来に希望が持てないときがない」で64.3%であった。逆に，否定的な心理的状況の比率が最も高いのは「自分に自信が持てないときがある」で67.9%，次いで「今の自分に満足していない」で53.0%であった（表6-1）。肯定的な心理的状況が過半に達するのは5項目，否定的な心理的状況が過半に達するのは2項目，両者半々が1項目であるので，総じて，項目数に関しては肯定的な自己評価項目がやや優勢といえる。

(2)「現在の心理的状況」の分布

「現在の心理的状況」についての回答を得点化して，「現在の心理的状況」の分布をヒストグラムで示すと図2のようになる。得点が高いほど現在の心理的状況が「良好」であることを表し，得点が低いほど「不良」であることを表している（図2）。

得点が「低い」から「高い」の順に「現在の心理的状況」を「心理的損傷多い」「やや多い」「やや少ない」「少ない」の4区分で示すと表6-2のようになる。「多い」25.6%，「やや多い」15.2%，「やや少ない」38.6%，「少ない」20.6%，となっている（表6-2）。

表6-1　生徒の「現在の心理的状況」（2分法）（%）

現在の心理的状況	はい	いいえ
①自分には、人にじまんできるところがたくさんある	51.7	48.3
②どんな人でも無理なく仲良くできる	65.7	34.3
③今の自分に満足している	47.0	53.0
④自分の意見は自信を持って言える	53.7	46.3
⑤人と接することに不安なときがある	50.0	50.0
⑥友だちにきらわれることがこわくて、意見や行動を合わせてしまうことがある	43.8	56.2
⑦自分に自信が持てないときがある	67.9	32.1
⑧将来に希望が持てないときがある	35.7	64.3

(3)「現在の心理的状況」のいやがらせ被害経験の「有無」間での比較

図 2 「現在の心理的状況」合計のヒストグラム

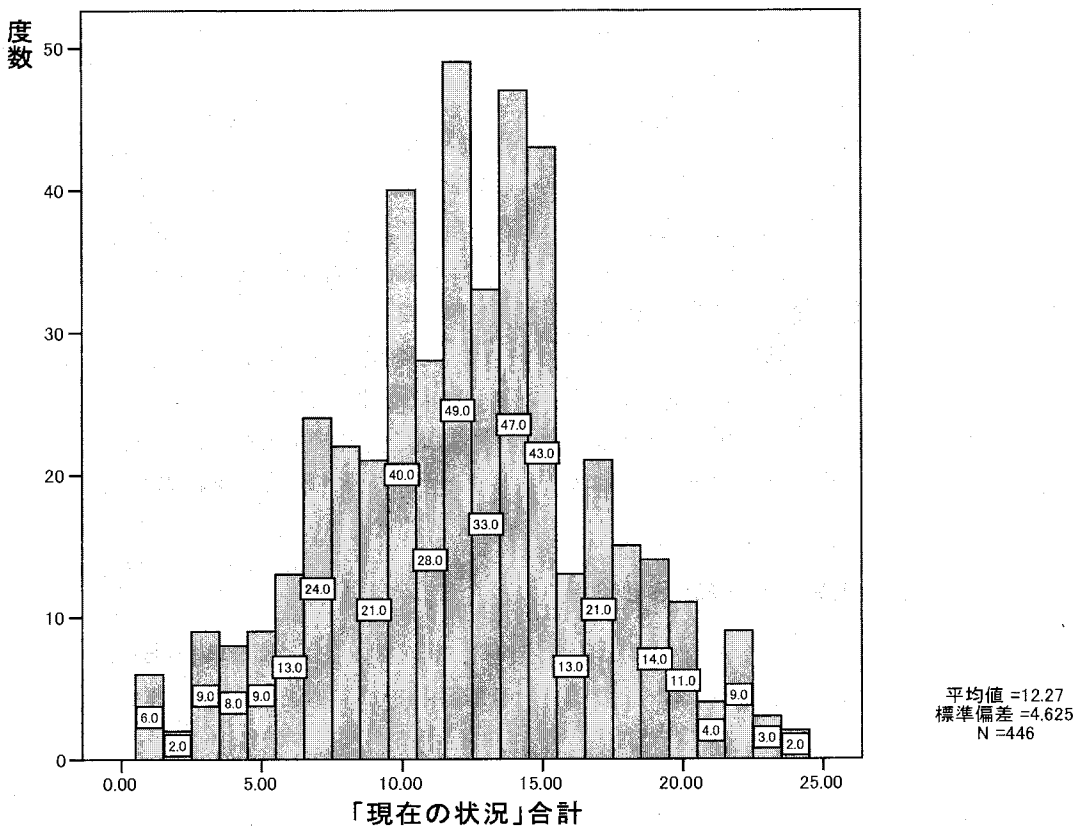

表 6-2　心理的損傷の多寡：「現在の心理的状況」の 4 区分

		度数	パーセント	有効パーセント	累積パーセント
有効	心理的損傷多い	114	25.6	25.6	25.6
	心理的損傷やや多い	68	15.2	15.2	40.8
	心理的損傷やや少ない	172	38.6	38.6	79.4
	心理的損傷少ない	92	20.6	20.6	100.0
	合計	446	100.0	100.0	

表 6-3-1 「現在の心理的状況」のいやがらせ被害経験「有無」間での比較：グループ統計量

	いやがらせ被害経験の有無	N	平均値	標準偏差	平均値の標準誤差
「現在の状況」合計	いやがらせ被害経験なし	211	13.2180	4.68227	.32234
	いやがらせ被害経験あり	233	11.3734	4.39166	.28771

表 6-3-2 「現在の心理的状況」のいやがらせ被害経験「有無」間での比較：独立サンプルの検定

		等分散性のための Levene の検定		2 つの母平均の差の検定						
		F 値	有意確率	t 値	自由度	有意確率（両側）	平均値の差	差の標準誤差	差の 95% 信頼区間 下限	差の 95% 信頼区間 上限
「現在の状況」合計	等分散を仮定する。	1.083	.299	4.283	442	.000	1.84462	.43069	.99816	2.69108
	等分散を仮定しない。			4.269	430.539	.000	1.84462	.43206	.99540	2.69384

「現在の心理的状況」はいやがらせ被害経験の「有無」間で有意な差があるのだろうか。

「いやがらせ被害経験なし」と「いやがらせ被害経験あり」の得点の平均値はそれぞれ 13.2, 11.4 である（表 6-3-1)。この 2 つの平均値の間の差が有意かどうかを t 検定でみる。表 6-3-2 において，Levene の検定で等分散の仮説が棄却されないので「等分散を仮定する」欄をみると，両者の間の差は p 値＝0.000＜0.001 で統計的に有意である（表 6-3-2)。すなわち，「いやがらせ被害経験なし」のグループでは現在の心理的状況が「良好」であり，「いやがらせ被害経験あり」のグループでは「不良」であることが，統計的に立証された。

「いやがらせ被害経験あり」のグループで現在の心理的状況が「不良」（＝心理的損傷の程度が高い）であることは，いやがらせ被害経験の影響が深刻であることを表している。いやがらせの被害経験は生徒たちの現在の心理的状況に無視できない影響を及ぼしている，すなわち生徒たちに心理的損傷をもたらしていることを見て取ることができるのである。

8. いやがらせの原因といやがらせへの対応策

(1) いやがらせの原因

生徒たちはいやがらせの原因がどこにあると思っているのだろうか。

「いやがらせをする人に問題がある」と回答した者が最も多く有効回答者 422 人のうちの 58.3% を占める。次いで「いやがらせをされる人に問題がある」と回答した者が 37.7%，以下，「いやがらせをする子の親のしつけに問題がある」19.7%，「学級の生徒全体に問題がある」15.2%，「社会全体に問題がある」14.0%，「先生や学校の指導に問題がある」11.6%，「その他」3.8%，とつづいている（表 7-1)。

(2) いやがらせへの対応策

生徒たちは，いやがらせへの対応策をどのように考えているのだろうか。

「先生がいやがらせをする子に注意する」が最も多く，有効回答者 420 人のうちの 30.0% がそのように回答している。次いで「学校で話し合いをする」の 29.3%，以下，「家庭でのしつけの見直しをする」及び「社会で許さないというきまりをつくる」25.7%，「学校に相談窓口をつくる」，「学校で道徳などの授業をする」及び「地域で子どもを育てる環境をつくる」11.9%，「その他」11.7%，とつづいている（表 7-2)。

表 7-1　いやがらせの原因は何だと思うか（多重回答，2 つまで選択）

		応答数		ケースのパーセント
		N	パーセント	
いやがらせの原因	いやがらせをされる人に問題がある	159	23.5%	37.7%
	いやがらせをする人に問題がある	246	36.4%	58.3%
	学級の生徒全体に問題がある	64	9.5%	15.2%
	先生や学校の指導に問題がある	49	7.2%	11.6%
	いやがらせをする子の親のしつけに問題がある	83	12.3%	19.7%
	社会全体に問題がある	59	8.7%	14.0%
	その他	16	2.4%	3.8%
合計		676	100.0%	160.2%

表7-2　いやがらせをなくすためにはどうしたらいいと思うか（多重回答，2つまで選択）

		応答数		ケースのパーセント
		N	パーセント	
いやがらせをなくすための方法	先生がいやがらせをする子に注意する	126	19.0%	30.0%
	学校に相談窓口をつくる	50	7.5%	11.9%
	学校で道徳などの授業をする	50	7.5%	11.9%
	学級で話し合いをする	123	18.5%	29.3%
	家庭でのしつけの見直しをする	108	16.3%	25.7%
	社会で許さないというきまりをつくる	108	16.3%	25.7%
	地域で子どもを育てる環境をつくる	50	7.5%	11.9%
	その他	49	7.4%	11.7%
合計		664	100.0%	158.1%

9. まとめ

(1) いやがらせ被害の経験率

① いやがらせの種類別被害率：「冷やかしやからかい，悪口を言われた」が最も多く，以下「たたかれたり，けられたりした」，「仲間はずれや集団で無視をされた」，とつづく。

② いやがらせ被害の種類別内訳：「冷やかしやからかい，悪口を言われた」が最も多く，以下「たたかれたり，けられたりした」，「仲間はずれや集団で無視をされた」，とつづく。

③ いやがらせ被害経験の有無：「いやがらせ被害経験あり」が52.5%，「いやがらせ被害経験なし」が47.5%で，「いやがらせ被害経験あり」が過半に達している。

(2) 最も傷ついたいやがらせ被害経験

① 最も傷ついたいやがらせの選択数・内訳比・選択比：選択数・内訳比が最も多かった（高かった）のは「冷やかしやからかい，悪口を言われた」，選択比は「仲間はずれや集団で無視をされた」が最も高かった。選択比の2番目は「冷やかしやからかい，悪口を言われた」であった。

② 動揺の程度：「とても動揺した」が最も多かった。

③ いやがらせの相手（加害者）：「クラスメイト」が最も多かった。

④ 相手（加害者）の人数：「一人」が最も多かった。

⑤ 場所：「教室」が最も多かった。

⑥ 継続期間：「1回だけ」が最も多かった。

⑦ 対処法：「親に相談」が最も多く，次いで「誰にも相談しなかった」であった。

⑧ 対処の結果：「いやがらせがなくなった」が8割強を占めた。

⑨ いやがらせがなくなった理由：「自然になくなった」が最も多く，次いで「先生が注意してくれた」であった。

(3) いやがらせ被害の男女間比較

①「冷やかしやからかい，悪口を言われた」：「女子」のほうが被害経験率が高かった。

②「たたかれたり，けられたりした」：「男子」のほうが被害経験率が高かった。

③「仲間はずれや集団で無視をされた」：「女子」のほうが被害経験率が高かった。

④「お金をとられたり，持って来いと言われた」：「男子」のほうが被害経験率が高かった。

⑤「持ち物をかくされたり，こわされたり，ぬすまれたりした」：「男子」のほうが被害経

験率が高かった（n.s.）。

⑥「パソコンや携帯電話で悪口を書き込まれたり，いやなことをされた」:「女子」のほうが被害経験率が高かった。

⑦「上の項目以外でいやがらせを受けた」:「女子」のほうが被害経験率が高かった。

⑧「いやがらせ被害経験の有無」:「女子」のほうが被害経験率が高かった。

⑨「最も傷ついたいやがらせ被害経験」:「たたかれたり，けられたりした」で「男子」，「仲間はずれや集団で無視をされた」で「女子」，「持ち物をかくされたり，こわされたり，ぬすまれたりした」で「男子」のほうが被害経験率が高かった。

⑩「動揺の程度」:「動揺した」の比率は「女子」のほうが高かった。

⑪「いやがらせの継続期間」: 概して，「男子」は「1回だけ」が多く，いやがらせを「繰り返し受けている」のは「女子」に多い。

⑫「何もしないでいやがらせをされるまま」（対処法）:「女子」のほうが多かった。

⑬「一人でやり返した」（対処法）:「男子」のほうが多かった。

⑭「親に相談」（対処法）:「女子」のほうが多かった。

⑮「きょうだいに相談」（対処法）:「きょうだいに相談」したのは「女子」のみであった。

⑯「友だちに相談」（対処法）:「女子」のほうが多かった。

⑰「担任の先生に相談」（対処法）:「女子」のほうが多かった（n.s.）。

⑱「誰にも相談しなかった」（対処法）:「女子」のほうが多かった（n.s.）。

⑲「いやがらせがなくなった理由」（いやがらせがなくなった場合）:「みんなで話し合いをした」では「女子」，「自然になくなった」では「男子」，「いやがらせをする子に抗議をした」「自分の代わりに他の子がいやがらせを受けた」「友だちがとめてくれた」の3項目では「女子」の比率が高かった。

(4) いやがらせ被害の背景要因

①「保護者は回答者の話を真剣に聞いてくれる」と「いやがらせ被害経験の有無」との関係:「保護者は回答者の話を真剣に聞いてくれる」場合，「いやがらせ被害経験なし」が多い。

②「1番悩んだり心配していること」と「いやがらせ被害経験の有無」との関係:「友人関係」「その他」「母親との関係」に悩んだり心配している場合は「いやがらせ被害経験あり」が多く，「悩みや心配はない」場合と「塾や習い事」「きょうだいとの関係」に悩んだり心配している場合とでは「いやがらせ被害経験なし」が多い。

③「悩み・心配の有無」と「いやがらせ被害経験の有無」との関係:「悩み・心配がある」場合は「いやがらせ被害経験あり」が多く，「悩み・心配はない」場合は「いやがらせ被害経験なし」が多い。

④「休み時間や放課後などに多くの友だちより，決まった友だちと一緒にいる」と「いやがらせ被害経験の有無」との関係:「決まった友だちと一緒にいる」と答えた生徒の場合は「いやがらせ被害経験あり」が多く，「いない」と答えた生徒の場合は「いやがらせ被害経験なし」のほうが多かった。

(5)「現在の心理的状況」といやがらせ被害経験の有無

① 生徒の「現在の心理的状況」: 肯定的な心理的状況において比率が最も高いのは「どんな人でも無理なく仲良くできる」で，次いで「将来に希望が持てないときがない」であった。逆に，否定的な心理的状況において比率が最も高いのは「自分に自信が持てないときがある」で，次いで「今の自分に

満足していない」であった。

② 「現在の心理的状況」の分布：「心理的損傷やや少ない」(38.6%)，「多い」(25.6%)，「少ない」(20.6%)，「やや多い」(15.2%)，の順であった。

③ 「現在の心理的状況」のいやがらせ被害経験の「有無」間での比較：「いやがらせ被害経験なし」のグループでは現在の心理的状況が「良好」であり，「いやがらせ被害経験あり」のグループでは「不良」であることが，統計的に立証された。

(6) いやがらせの原因といやがらせへの対応策

① いやがらせの原因：多いほうから順に，「いやがらせをする人に問題がある」，「いやがらせをされる人に問題がある」，「いやがらせをする子の親のしつけに問題がある」，「学級の生徒全体に問題がある」，「社会全体に問題がある」，「先生や学校の指導に問題がある」，「その他」，となっている。

② いやがらせへの対応策：多いほうから順に，「先生がいやがらせをする子に注意する」，「学校で話し合いをする」，「家庭でのしつけの見直しをする」及び「社会で許さないというきまりをつくる」，「学校に相談窓口をつくる」及び「学校で道徳などの授業をする」及び「地域で子どもを育てる環境をつくる」，「その他」，となっている。

10. 考　察

(1) いやがらせ被害の経験率

いやがらせの種類別被害率については，「冷やかしやからかい，悪口を言われた」45.7%，「たたかれたり，けられたりした」26.4%，「仲間はずれや集団で無視をされた」19.3%，「持ち物をかくされたり，こわされたり，ぬすまれたりした」18.3%，「パソコンや携帯電話で悪口を書き込まれたり，いやなことをされた」10.6%，「お金をとられたり，持って来いと言われた」及び「上の項目以外でいやがらせを受けた」2.7%，となっている。今話題のネットいじめ被害（「パソコンや携帯電話で悪口を書き込まれたり，いやなことをされた」）は1割強を占めている（表2-1)。

これらのいやがらせを1つでも受けた経験がある「いやがらせ被害経験あり」は52.5%と半数を超えている（表2-3)。これらのいやがらせは，通常「いじめ」のカテゴリーとして挙げられているものであり，また「いやがらせ被害経験なし」に比べて有意に高い心理的損傷をもたらしているものであるから，ほぼ「いじめ」に該当するものと見なしうる。本調査で明らかになったいやがらせ（いじめ）被害経験率は，文部科学省の把握した平成17（2005）年度のいじめ発生件数（公立の小学校・中学校・高等学校・特殊教育諸学校）20,143件という数字が氷山の一角にすぎないことを表している（文部科学省 2009)。なお，本調査票で「いじめ」という言葉を使わず「いやがらせ」という言葉を使ったのは，「いじめ」という言葉が生徒に与えるインパクトを和らげるための調査技法上の工夫にすぎない。

(2) 最も傷ついたいやがらせ被害経験

最も傷ついたいやがらせ被害経験として選ばれた選択比は，「仲間はずれや集団で無視をされた」が最も多く65.9%，次いで「冷やかしやからかい，悪口を言われた」の44.8%，以下，「上の項目以外でいやがらせを受けた」33.3%，「持ち物をかくされたり，こわされたり，ぬすまれたりした」29.6%，「パソコンや携帯電話で悪口を書き込まれたり，いやなことをされた」25.5%，「お金をとられたり，持って来いと言われた」25.0%，「たたかれたり，けられたりした」24.8%，となっている（表3-1)。

「仲間はずれや集団で無視」や「冷やかしやからかい，悪口」といったネグレクト的・心理的い

やがらせが「最も傷ついた被害」として受け取られる比率が高く，「たたかれたり，けられたりした」という身体的いやがらせはその比率が低かった。ネグレクトや心理的暴力のほうが身体的暴力よりも被害者を傷つける度合いが高いことが推定される。

いやがらせ被害を受けたとき被害者の88.8%がなんらかの程度において「動揺」しており，全く「動揺」しなかったのは11.2%にすぎなかった（表3-2)。にもかかわらず，「誰にも相談しなかった」及び「何もしないでいやがらせをされるまま」の「泣き寝入り」が合計内訳比で33.5%を占めている。「やめてと言った」と「一人でやり返した」及び「その他の対処法」の「積極的対応」は合計24.8%，誰かに「相談した」のは合計39.6%を数える。「相談の相手」は「親」(14.6%)と「友だち」(12.7%)が多いが，「担任の先生」も8.0%を占めている（表3-7)。「泣き寝入り」派に対するなんらかの対応が必要である。

最も傷ついたいやがらせ被害経験として選ばれた被害経験のなかで「1回だけ」の被害が41.0%を占めていることも注目に値する（表3-6)。「1回だけ」の被害は「継続的な」被害に比べてとかく軽視されがちであるが，その「1回だけ」の被害の4割強が「最も傷ついた」いやがらせ被害経験として受け止められているのである。たかが「1回だけ」として無視されることがあってはならない。

いやがらせを受けたときの対処の結果としていやがらせがなくなった場合，その理由としては，被害者の抵抗によるのでもなく，また第3者の仲介によるのでもなく「自然になくなった」というケースが半数を超える。現在の教室には仲裁者はいなくなったと言われるが（森田・清永 1994)，この調査データでは，「友だちがとめてくれた」と「みんなで話し合いをした」とを合わせて，「仲裁者役割」が演じられたと見なされるケースが計11.6%にのぼる。また，「先生が注意してくれた」が13.8%に及び，いやがらせ場面で教師が一定の肯定的役割を果たしていることが窺われる（表3-9)。

(3) いやがらせ被害の男女間比較

「冷やかしやからかい，悪口を言われた」，「仲間はずれや集団で無視をされた」，「パソコンや携帯電話で悪口を書き込まれたり，いやなことをされた」，「上の項目以外でいやがらせを受けた」の4項目のいやがらせは，「女子」のほうが被害経験率が高かった。「たたかれたり，けられたりした」，「お金をとられたり，持って来いと言われた」，「持ち物をかくされたり，こわされたり，ぬすまれたりした」(n.s）の3項目のいやがらせは，「男子」のほうが被害経験率が高かった（表4-1～4-7)。ネグレクト的・心理的いやがらせの場合は「女子」の被害率が高く，身体的・暴力的いやがらせの場合は「男子」の被害率のほうが高い。主として「女子」は非暴力的なネグレクトや心理的な仕方でのいやがらせを受けており，「男子」は暴力的な身体的な仕方でのいやがらせを受けている，といえよう。

「いやがらせ被害経験の有無」と性別との関係では，「女子」は「被害経験あり」57.5%，「被害経験なし」42.5%で「被害経験あり」が多く，「男子」は「被害経験なし」51.8%，「被害経験あり」48.2%で「被害経験なし」が多い。こうして「男子」に比べて「女子」の被害経験率は高い（表4-8)。しかも，「女子」は，被害を受けたときの「動揺」の程度が「男子」に比べて高い（表4-10)。さらに，「いやがらせの継続期間」に関して，概して，「男子」は「1回だけ」が多く，いやがらせを「繰り返し受けている」のは「女子」に多い（表4-11)。また，いやがらせに対する対処法について，「何もしないでいやがらせをされるまま」，「誰にも相談しなかった」(n.s.）のは「女子」のほうが多く，反面，「一人でやり返した」のは「男子」のほうが多かった。

一方，「相談」した場合における「親に相談」，「きょうだいに相談」（「相談」したのは「女子」のみ），「友だちに相談」，「担任の先生に相談」（n.s.）という「相談相手」については「女子」のほうが多かった（表4-12～4-18）。

なお，対処によっていやがらせがなくなった場合の「いやがらせがなくなった理由」に関しては，「みんなで話し合いをした」では「女子」，「自然になくなった」では「男子」，「いやがらせをする子に抗議をした」「自分の代わりに他の子がいやがらせを受けた」「友だちがとめてくれた」の3項目では「女子」の比率が高かった（表4-19）。

「女子」はいやがらせ被害を多く受け，「動揺」も大きく「継続期間」も長く，また対応についても「何もしないでいやがらせをされるまま」，「誰にも相談しなかった」という「泣き寝入り」派が多かった。いじめ被害の場面でも女性のほうが抑圧されているという結果が本調査データでは出ている。

しかし，他方，「女子」は「相談した」場合には，「親」「きょうだい」「友だち」「担任の先生」というように多角的な「相談相手」を活用しているし，「みんなで話し合いをした」ケースも「女子」のほうが多い。その意味で，いやがらせ場面を他の力を借りて積極的に打開しようとする姿勢も「女子」には見受けられる。ここにはいやがらせ場面を乗り越えるための芽が認められる。

(4) いやがらせ被害の背景要因

「保護者は回答者の話を真剣に聞いてくれる」と「いやがらせ被害経験の有無」との関係に関しては，「保護者は回答者の話を真剣に聞いてくれる」場合，「いやがらせ被害経験なし」が多い。「1番悩んだり心配していること」と「いやがらせ被害経験の有無」との関係に関しては，「友人関係」「その他」「母親との関係」に悩んだり心配している場合は「いやがらせ被害経験あり」が多く，「悩みや心配はない」場合と「塾や習い事」「きょうだいとの関係」に悩んだり心配している場合とでは「いやがらせ被害経験なし」が多い。「悩み・心配の有無」と「いやがらせ被害経験の有無」との関係に関しては，「悩み・心配がある」場合は「いやがらせ被害経験あり」が多く，「悩み・心配はない」場合は「いやがらせ被害経験なし」が多い。「休み時間や放課後などに多くの友だちより，決まった友だちと一緒にいる」と「いやがらせ被害経験の有無」との関係に関しては，「決まった友だちと一緒にいる」と答えた生徒の場合は「いやがらせ被害経験あり」が多く，「いない」と答えた生徒の場合は「いやがらせ被害経験なし」のほうが多かった（表5-1～5-4）。

「悩み・心配」を持っている場合，とくに「友人関係」「その他」「母親との関係」に悩んだり心配している場合，それらの「悩み・心配」の解放の場を求めて特定の決まった仲間集団に過剰に一体化し，その集団における軋轢からいやがらせの犠牲者になるという構図が窺われる。過剰同調しているため集団内における些細な齟齬もいやがらせの対象となる。過剰同調しているためいやがらせ被害を受けてもその集団から離れられない。ただし，「保護者」が「真剣に話を聞いてくれる」姿勢を持っている場合には，それが過剰帰属，いやがらせそれ自体の予防，帰属集団からの脱却への援助として働く可能性がある。こうしたいやがらせ被害の背景要因に関する知見を本調査データは示している。

(5)「現在の心理的状況」といやがらせ被害経験の有無

生徒の「現在の心理的状況」については，「心理的損傷やや少ない」(38.6%)，「多い」(25.6%)，「少ない」(20.6%)，「やや多い」(15.2%)，の順であった。「多い」と「やや多い」を合わせた「心理的損傷多い」は40.8%であった（表6-2）。かなりの生徒が心理的損傷を抱えていることがわかる（本論では述べていないが，$p<.01$ で「女

子」において心理的損傷の度合いは高い)。

しかも，この心理的損傷は，「いやがらせ被害経験あり」のグループに有意に高い（表6-3-1～6-3-2)。本調査で把握した「いやがらせ」はまさに「いじめ」であり，その被害者に統計的に有意に高い心理的損傷を負わせているのである。このようないやがらせは，防止され，その被害者は癒されなければならない。

(6) いやがらせの原因といやがらせへの対応策

いやがらせの原因に関する生徒の考えは，多いほうから順に，「いやがらせをする人に問題がある」，「いやがらせをされる人に問題がある」，「いやがらせをする子の親のしつけに問題がある」，「学級の生徒全体に問題がある」，「社会全体に問題がある」，「先生や学校の指導に問題がある」，「その他」，となっている（表7-1)。「加害者」に問題ありとする見解が最も多いが（58.3%)，「被害者」に問題を帰属する見解もそれにつづいて多い（37.7%)。この点に関しては，生徒たちにいやがらせ＝いじめの真相をより深く理解させる努力が今後必要であろう。

いやがらせへの対応策に関する生徒の見解としては，多いほうから順に，「先生がいやがらせをする子に注意する」，「学校で話し合いをする」，「家庭でのしつけの見直しをする」及び「社会で許さないというきまりをつくる」，「学校に相談窓口をつくる」及び「学校で道徳などの授業をする」及び「地域で子どもを育てる環境をつくる」，「その他」，となっている（表7-2)。

「学校」，「家庭」，「地域」，「社会」のそれぞれの役割について，バランスよく意見が分布している（多少学校への過剰期待は見受けられるにしても)。いやがらせは「学校」だけでも「家庭」だけでも「地域」だけでも「社会」だけでも解決できない。これらの集団の協働こそが問題の解決にとって必要であることを，生徒たちは無意識のなかで理解しているのかもしれない。この生徒たちの持つバランス感覚を育てていくことが，いやがらせ＝いじめをなくす上で重要なことであるにちがいない。

［完］

［謝辞］

本調査の質問に真摯に応えてくださった2校の中学校の生徒のみなさんにお礼申し上げます。調査実施の労をお取りいただいた両校の校長先生及びその他の先生方にもお礼申し上げます。両校にご紹介くださった大阪樟蔭女子大学児童学部の佐藤栄一教授にも感謝申し上げます。

本調査の協同研究者であった大阪樟蔭女子大学人間科学部学生（当時）の福田麻子，山中麻衣のお二人にも，惜しみない努力と協力に対して敬意を表します。なお，この二人は本調査のデータを基に立派な卒論を平成20年度に提出されました。

ちなみに，本研究は，平成20年度大阪樟蔭女子大学特別研究助成費を受けて実施されたものである。

［参　考　文　献］

土井隆義，2008，『友だち地獄―「空気を読む」世代のサバイバル』筑摩書房。

文部科学省，2009，『生徒指導上の諸問題の現状について（概要)』(http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/18/09/06091103.htm,2009.09.21)

森田洋司・清永賢二，1994，『新訂版　いじめ―教室の病い』金子書房。

大阪府，2009，『児童・生徒等の状況』(http://cache.yahoofs.jp/search/cache?p,2009.09.21)

藤本修編著，2005，『暴力・虐待・ハラスメント―人はなぜ暴力をふるうのか』ナカニシヤ出版。

小浜逸郎，1985，『学校の現象学のために』大和書房。

内藤朝雄，2001，『いじめの社会理論―その生態学的秩序の生成と解体』柏書房。

伊藤茂樹編著，2007，『リーディングス｜日本の教育と社会⑧いじめ・不登校』日本図書センター。

The Actual Conditions of Damages by Bullying: Some Analyses of Data from Investigation into the Actual Conditions of Bullying and the Opinions about Bullying among Public Junior High School Students in Osaka

Osaka Shoin Women's University
Yoshiyuki ISHIKAWA

ABSTRACT

We conducted "bullying" research to 490 students at two public junior high schools of Osaka in 2008. In this paper we analyze data of damages by bullying and show some knowledge from the analyses.

The contents of this paper are follows:

introduction

1. An outline of conduct of our research
2. The properties of respondents
3. The experience rate of being bullied
4. The most wounded experience of being bullied
5. The comparison of boys and girls in bullied experience
6. The background factors of being bullied
7. "The present psychological state" and whether students have bullied experience or not.
8. The causes of being bullied and the measure devised to deal with the problem of bullying
9. Summary
10. Consideration

Keywords: Bullying, Harassment